

第一〇回オンライン連続講座の報告

「父の遺した椅子 父の靖国合祀取消しの闘い」

日時…二〇二五年九月二七日(土曜日)

講師…松岡 勲 (靖国合祀取消し訴訟元原告、元教員)

今回の連続講座の講師である松岡勲さんは、生まれる

前から今まで靖国神社と格闘されてきました。松岡さんが誕生する前に父親は「出征」され戦死、戦後は母子家庭として苦労された「遺児」です。そして中学三年の時に「靖国集団参拝」に参加され、「もう一度行こう靖国へ」という作文も書いておられます。まさに英霊サイクルに組み込まれていました。母親の死後、遺品の中から靖国神社からの「合祀通知書」を発見し、その前年度から始まっていた「靖国神社合祀取消し裁判」に加わって今日まで闘ってこられました。そして靖国神社について研究をされています。

冠木理事長のあいさつ

今年は「戦後八〇年」ということでマスコミは戦争のことを特集しています。しかし加害責任については一切触れようとしていません。先日中国で「抗日八〇周年」の行事があり、それに鳩山由紀夫元首相が参加しました。この参加についてマスコミも政党も批判ばかりしています。その批判は、戦争の被害を強調したうえで、「そういうことを起こさないために、きっちりした軍備を持たなければいけない」というものです。こうした流れが今後、強く出てくると思います。戦争を取り上げて軍拡につな

いでいくということです。

私たち「わだつみ会」は加害責任を問題にしなれば、真の平和を獲得できないと考えています。一九八八年にわだつみ会は、規約を改訂し、「戦争責任」の追及を規約に組み込みました。まだまだ不十分であると考えており、これからも力を入れていきたいと思っています。

今日は松岡さんに戦争と侵略の神社である靖国神社についてお話をお願いいたします。

靖国神社との闘いは「戦争準備を許さない」闘いだ

今日は、三つのことを話したいと思います。

一つは、父親が戦死したこと。その後、母が育ててくれた戦争後の苦労について

二つ目は、靖国合祀取消し訴訟に原告として参加する中で考えてきたこと

三つ目は、現在、靖国神社が自衛隊と接近して、何をしようとしているのか、日本の軍事化について

今回の講座を準備していた八月末の毎日新聞に「自衛隊の熊本の健軍駐屯地に一二型長距離ミサイルが配備される」と報道されました。私はこれに非常に衝撃を受けました。中国、北朝鮮に向けた攻撃兵器が全国各地に配

備されようとしているということです。これは「靖国の合祀」と非常に関連していると思いました。安倍第二次内閣の武器三原則の改悪、安保関連法案の制定、そして岸田内閣の「敵基地攻撃能力」保有が石破政権の下で現実化されてきました。そして沖縄・南西諸島での軍拡と戦争準備が進められています。それと同時に並行的に自衛隊と靖国神社の接近が進められており極めて危険な動きです。

「父の遺した椅子」 戦争を伝えたい

今年の一月に、父が亡くなって八〇年となったので追悼の意味を込めて「父の遺した椅子」という小冊子を作りました。表紙に椅子が写っていますが、私の父徳一は大工であり百姓でした。そしてこの椅子を遺していきま

した。母はいつも「お父ちゃんが作った椅子」と言っていました。そして父

は大工仲間の手伝っ

てもらって自分の家を建てました。母は

何時もこの家を自慢していました。その家に私は今も住んで

父の遺した椅子



松岡 勲・第一文集

います。私も椅子を本の整理をするときなどに踏み台として使用すると、父の存在が心の中によりがえります。

私の父徳一は、盧溝橋事件が起こり満州事変となった一九三七年に高槻の工兵隊兵士として一回目の「出征」中国への侵略軍の一員として参加しています。

一九四四年三月に二回目の出征をしました。中国の漢口付近に出兵し、一九四五年一月に武漢近郊で戦死しています。その当時の話は『靖国を問う』（航思社・二〇一九）に書いています。上官の現況報告書では「中国湖北省で戦死、左顎部貫通銃創で即死」とされていますが遺骨はありません。従軍していた作戦は「大陸打通作戦（二号作戦）」であり、その直後に戦死していることになっています。本当にそうだったのか疑問があり、現実には死者の半数以上は餓死の可能性も大きいと言われています。

私は一九四四年の三月一七日生まれですが、父親はその日に大阪の天保山から「出征」したと母親から聞かされてきました。

父は大工でしたので、高槻にあった陸軍高槻工兵隊に入隊して侵略軍の一員として中国に参加しています。高槻の戦争展のグループが提起しているのですが、高槻の工兵隊はアジアの広い範囲で展開しているので、実際に

どういうことをしたのかを明らかにして、日本の侵略を具体的に追及したいと思っています。

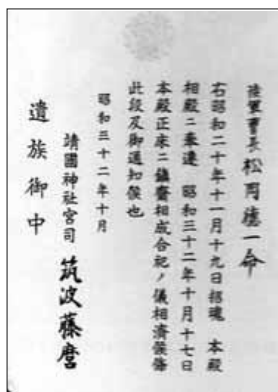
父と母は結婚し四三年に長男が生まれ（翌年に死亡）入籍し、四四年三月に私が生まれました。父は母が送付した私の写真を見てくれて「やっと安心した」と返信してくれました。その後、母は二枚目の写真を送りましたが、すでに一九四五年一月に武漢近郊で戦死しており見てもられませんでした。

靖国神社からの合祀通知

一九五七年（昭和三年）に靖国神社から、「合祀通知」が送られてきています。

戦後米軍に占領されて、靖国神社は一法人となり、米軍が占領中は合祀作業は進まず、一九五二年の講和条約の発効以降、徐々に収容されていない戦死者の合祀が進められました。そして一九五七年頃から急速に合祀が進められました。

この合祀通知は、母は



それを受け取っていましたが、私には死ぬまで見せてくれませんでした。二〇〇七年、母の死後、遺品を整理して初めて見るようになりました。私は中学三年で集団参拝に行っており、母も遺族会で何度か靖国神社に参拝しています。母はなぜこれを見せなかったのか不思議です。合祀作業は靖国神社で「御羽車」に合祀される戦没者の名簿を載せ「招魂斎庭」で英霊を招き、本殿に向かい合祀するとされています。戦前は天皇と皇后が靖国神社に参拝して「招魂祭」が行われていました。

その状態は、ネットで「靖国神社招魂祭」として検索すると、NHKのサイトで「日本ニュース」の一九四〇年の臨時大祭の記録が見ることが出来ます。非常に気持ちの悪いもので、たくさん人間が戦争に動員されて戦死し、それが英霊として祀られ、その多くの遺族たちが祀られていることを尊いと思われています。

これに異議を唱えたのは二〇〇七年に「合祀取消し」を提訴した原告と弁護士さん達であり、その人たちが切り拓かれたことで私も進む道が見えました。

靖国神社への集団参拝

当時の集団参拝の状態を紹介する、福井と京都のニュース「靖国遺児東京へ」が上映されました。

戦前にも集団参拝があり、「小国民の参拝」として小学校5・6年生を中心に植民地を含む全国から集団参拝が行われました。(戦前の朝鮮における靖国遺児参拝については、『反天皇制市民一七〇〇』(第五二号)に掲載しています)戦後の参拝では大阪では中学三年生が集団参拝を行いました。私の調査では、京都、大阪、広島、長崎などで行われました。

母は私を懸命に育ててくれ、私は「かーちゃん子」として育ちました。そして中学校三年の時に大阪府と遺族会の遺児靖国集団参拝に参加しました。集団参拝には大阪府下から八二五人の生徒が集まり、天王寺美術館の裏で大阪府と遺族会



靖国神社に早朝に昇殿



天王寺公園での出発式

から激励があり、夜行列車で東京まで、旅館で一時休憩して、まだ明るくなる前に靖国神社本殿に昇殿して宮司の話を聞き礼拝しました。

靖国神社の参拝後、皇居など東京を観光旅行して夜行で帰阪しました。この集団参拝は一九五〇年代に全国で行われていました。

集団参拝の後には、参拝の感想文を書いて「靖国文集」が作成されています。

その感想文に「私はなんとなく父は立派な死に方をしたんだなあと考えた。そうではないか、現在色々な人が馬鹿な死に方をしている。それと違って父の名は後の世まで、この本殿とともに残るではないか。しかし母は、父が戦死しても再婚もせずに僕を育ててくれた。それには計り知れない苦労があったろう。お父さん、僕はもっともっと勉強し、そして強くなるよ。社会に出ても今日のことは忘れず、立派な社会人になり、母と一緒にもう一度ここへやってくるから待っていてください。」と書いています。まさに「英霊サイクル」に組み込まれています。そして帰阪し天王寺公園で靴みがきをする少年を見て、「靖国の遺児」として「上から目線」で、「君たちもガンバレ」と呼びかけています。そんな私を発見した

ことは非常にきついことでした。

国家の嘘を見破った少女

分厚い遺児参拝文集を読み進めるうちに一人の少女の文章を見つけました。それは河上孝子さんの文章です。

「犠牲は美しい行為である。しかしそこに意志が働いて初めて美しいと言えるのであって、犠牲の気持ち無くして死んでいった者に、結果からみて犠牲の名で呼ぶのはかえって侮辱になりはしないか。父は召集令状、赤紙一枚によって操り人形と化され、別れたくもない親、妻子、知人との別離を命ぜられ、且つ犠牲の美名のもとに死をも命ぜられたのだ。私は靖国参拝を喜ばしい事とも目出たい事とも思わぬ。こうした日を与えられた私を不幸と悲しむ。」

また、参拝当日の靖国神社本殿での神主の話に対して、決して動揺することなく、父の死が英霊として意味づけられることを拒絶しています。

『もう沢山』と叫びたいのを押えながら、すすり泣きの聞える中を、私は終わりまで神主さんの顔を凝視してやめなかった。『寒い凍れるような雪の中、夏は太陽の下で国の為に雄々しく戦い死んでいかれたあなた方のお父さま。何と白々しい意志を持たぬ言葉だ。この飾りた

てられた言葉が、幾千人の遺族に向って語られたことか。おそらく神主さんの頭の中にその文章は暗記され、明確に覚えこまれていることと思う。明日も明後日も、遺族に向かつて語られるだろう。私はそんな安っぽい話など聞きたくはない。私にとって父の死は、もっともつと厳肅な、そして寂しさと恐しさを持って存在するのだ。私の体の二分の一は父によって形造られたのだ。神主さんの話にすすり上げた人達は、話の何処に心ひかれたのか、私には理解し難い。本殿を下りながら、初めて私は悲しい気持ちになったのだ。このような反問の連続と、もろもろの感情を私に与えて靖国神社参拝は終わった。」

実はこの人を探して調べたのですが、残念ながら彼女は二〇代後半に亡くなり、ご家族、ご親戚とも連絡を取ることは出来ませんでした。

靖国行動

二〇〇七年に母が他界し、その遺品の中から、靖国神社の「合祀通知書」(一九五七年合祀)が出てきました。これを契機に、前年度から始められていた靖国神社合祀取消し要求裁判闘争に、私は加わりました。以来、今日まで闘い続けています。もう残された時間は少ないですが、

出来るかぎり続けたいと思います。

靖国神社は「合祀の取消し」は出来ないとの立場ではありますが、一応、靖国神社の事務局は、我々は遺族であるので今までは少なくとも一時間程度は応接をしてきました。

ところが、今年は靖国神社への申入れ行動への対応を拒否してきました。

自衛隊元幹部が、靖国神社の宮司とか幹部となっています。自衛隊の元幕僚長が、もう一度戦争があった時に自衛隊員が戦うためには、靖国神社への合祀がされなければ、と言っています。

自衛隊隊員の集団参拝が行われています。これから何が起こるかわかりません。少なくとも、靖国への合祀に反対する闘いを続けていかなければなりません。



最後にまとめとして

松岡さんの「父の遺した椅子」の遺された課題

①父親の加害責任を調査する。関連して高槻工兵隊の歴史を調査したいと思っています。

②父親の不在の中で、父親はなんであつたのかを考えてきたが、母親がどのような思いで戦後を生きてきたかに、手が届いていなかった。例えば、結婚式を挙げているにもかかわらず、長男が生まれるまで入籍されなかったことについて、母は「ひどい制度やつた」と言っていたそうだが、その気持ちを想像してみなければならぬと思う。

③伊勢や広島など修学旅行の変遷について

「反天皇制市民一七〇〇」(五四号)で修学旅行体験や、修学旅行の行き先などを調査して書いています。私が小学校の教員になって最初の修学旅行は伊勢で非常に嫌でしたが、今でも大阪市の一部では伊勢修学旅行が残っています。最近では、少数ではあるが知覧や鵜野の特攻基地への修学旅行などが行われています。また、職場体験学習の対象に自衛隊が出てきているという問題点が指摘されています。

ぼくが父親の戦争責任を考えるきっかけは何か。

高校一年生の時ですが、今の上皇が皇太子で成婚式のパレードが行われました。それをテレビ中継で見ている少年が皇太子に石を投げ、馬車に乗り込もうとして逮捕されました。これを見て「やった」と思いました。その時から一か月後、春日丘高校の屋上に上がつて街並みを見ていて、何を思ったのか突然家に走って帰って、母親に「お父ちゃんは戦争に行ってるから向こうで人殺しているはずや」と問いかけました。おふくろは真つ青な顔になって、手を止めて、「ちゃう！うちのお父ちゃんは虫も殺さぬいい人や！そんなことあらへん！」と拒否しました。

それが僕の中に残っていて、それからテレビで八月五日の慰霊祭の実況があると、おふくろは必ず見えています。どういう思いで見えていたかわかりませんが、僕は後ろから見ていて問いかけることは出来ませんでした。おふくろが死んでから、ようやく合祀取消し訴訟に参加できました。それが私の体験の基底部分です。

いっぱい言い残したこともあります。ぼくの世代で父親を戦死させた子どもたちは同じような考えを持っているのではないかと思います。

〈ここで一〇分間休憩〉

講演を補足し深めた質疑応答

(質問) 松岡さんが「靖国遺児」から「靖国反対」に変わったきっかけは何でしょうか？

教師になって、高槻に転勤し、富田小学校や第四中学校の同和推進校での教育の中で被差別部落の子どもたちと付き合ったこと、そして、組合関係の自治センターで勉強したことがあります。ただ靖国問題は母が死ぬまでは取組めなかったことであり、靖国問題は私にとって「心の重し」が大きかった。

(質問) ここ数年自衛隊が学校現場に入ってきている。そのあたりについては、松岡さんどうでしょう

私も脊椎の圧迫骨折をして治療中でしたが、自衛隊を使った職場体験の問題などについて運動に参加して行きたいと思っています。今はリハビリ中なのでそんなに関われませんが出来ることをしたいと思います。

(質問) 松岡さんのように靖国問題を追及されている遺児はおられるのでしょうか

少ないですが、でも今の状況で合祀取消しの闘いは止めてはならないと思います。運動の中心であった菅原龍

憲さんも、古川桂子さんも亡くなりました。

(質問) 合祀取消し拒否の靖国神社の論理はどんなものでしょうか

明治天皇の意志に従ってきたので変えられない、もう一つは、合祀というのはまとめて一つの座布団に合祀しているのです、一つだけ取り出すことは出来ないという、どちらもわけのわからない論理です。

(質問) 戦死した人の名簿は、戦後も厚生省が靖国神社が提出してきたのでしょうか

厚生省は米軍の占領中を含め戦死者のリストを靖国神社に送付していました。そして講和条約成立後、合祀が行われました。自衛官の護国神社への合祀などの多くの問題が残っています。

(最後に松岡さんは自らの課題として)

戦中の台湾、朝鮮、満州での集団参拝、沖縄での集団参拝について調査を進めたいと思っています。

後日、参加者から、朝鮮での情報が寄せられました。

講師 松岡勲さんの主な著作

『靖国を問う』(二〇一九年 航思社)

戦争遺児の靖国集団参拝、靖国強制合祀と戦争体験の継承

『父の遺した椅子』(二〇二五年 ニシダ印刷製本)

『反天皇制市民一七〇〇』(反天皇制市民一七〇〇ネット

ワーク) 毎号のように「遺児参拝」問題を掲載。

『遺児集団参拝―戦前と戦後』(四七号 二〇二〇年)

『護国神社遺児参拝』(五一号 二〇二二年)

『朝鮮の靖国神社遺児参拝』(五二号 二〇二二年)

『戦後、伊勢修学旅行は…』(五四号 二〇二三年)

わだつみ会連続講座

第一三回合祀取消し要求靖国行動

靖国神社の応接拒否に「抗議・要請」

(合祀イヤです・アジアネットワーク 靖国行動) 吉田 文枝

一〇月二七日。私たち「靖国合祀イヤです アジアネットワーク」は全国各地(沖縄、福岡、島根、石川、大阪、奈良そして東京)からそれぞれがしたためた「合祀取消し要求書」を携えて、靖国神社に赴いた。これまでの「靖国行動」では、靖国神社は面談に応じてきた。しかし今回は、「もうこれ以上の回答を申し上げることも」ないと面談要求を拒んできた。

私たちは遺族であり、靖国神社は宗教法人である。日本政府の憲法違反の「祭神名票」提供によって行われた

靖国神社の合祀に異議申し立てをしている遺族の存在を無視することは、靖国神社が宗教法人ならできない。その考えに基づいて、第一三回「合祀取消し要求 靖国行動」を一〇月二七日に実施した。全員そろって、社務所に案内を乞うたが、担当者が出払っていて面会できないとの回答。面会を要求し抗議しながら行かない。そこで、「合祀取消し要求書」を提出し受け取るよう要求した。靖国神社として受け取った証明としての「受取証」を要求し話し合い、受付レベルの受領記録を受け取った。

最後に、応接を拒否した靖国神社への「抗議・要請」を読み上げて、第一三回「合祀取消し要求 靖国行動」を終了した。

抗議と要請 (要約)

靖国神社は戦死者の「英霊」視をやめろ！

靖国神社は、直ちに霊璽簿から私たちの

家族の名前を削除してください！

私たち「靖国合祀イヤです アジアネットワーク」は全国各地の遺族から「合祀取消し要求書」を提出するために靖国神社に來ています。私たちは、家族の死を「天皇のため国のために進んで尊い命を捧げた」とする靖国神社の勝手な意味づけを拒否し、靖国神社が遺族の了解もなく合祀し、その合祀を「取り消せ！」という私たちの要求を拒んでいることに断固抗議します。

私たちは合祀取消しの意味を次のように考えています。遺族もまた、天皇制軍国主義国家によって有無を言わず皇軍兵士とされ、戦場に引き出され、死に至らしめられた者たちを「国のため、尊い命を捧げた英霊」だとする言説を許してきました。戦死者の死を「英霊」とし

てはめたたえることは侵略戦争そのものとその過程でなした皇軍兵士の行為を是認することです。

私たち日本人遺族にとつての靖国との闘いは、逃れようのなく日本人としての罪跡を担うとともに、悲惨な「加害者」としてあった戦死者の思いを引き取る責任があります。「靖国問題」はこの国とこの国に生きる私たちがどうしても負っていかねばならない歴史的、国家的課題です。

今年、靖国神社は私たちとの面談を拒否しました。靖国神社は、日本政府から提供された「祭神名票」によって、私たち家族の名前に「命」をつけて霊璽簿を作成し、それを霊璽簿奉安殿に収めることで、戦死者が「神」になったと言います。靖国神社は兵士が「死んだこと」のみが大切に、兵士がどのように生きてきて、なぜ死ななければならなかったかには関心がありません。戦死者は遺族の中で共に生きる家族です。靖国神社には遺族のそうした思いに応える義務があると考えています。

私たちは、靖国神社は例年のような通り一遍の返答ではなく、遺族一人ひとりに誠実に向き合い、丁寧な回答するとともに、質問に回答するように求めます。

ここ数年、靖国神社は自衛隊との関係を強めています。戦前と同様、靖国神社は新たな戦争のための兵士調達機関となるつもりなのか。宮司や崇敬会総代など靖国神社の幹部に入った元自衛隊幹部の言辞は、自衛隊が、日本国憲法で禁止されている他国に対する武力行使を行うことを暗示し、自衛官に「死」の覚悟を追っているように見えます。

私たち遺族は戦争反対であり、まして他国に対する侵略戦争など絶対に許さない。たとえ自衛官であれ、「戦死」などがあつてはならないのです。しかし、今や「新たな戦前だ」と言われています。私たちは、靖国神社が戦争準備の一環にくみすることを絶対許さない。

靖国神社は戦死者の「英霊」視をやめろ！

靖国神社は、直ちに霊壘簿から私たち家族の

名前を削除してください！

二〇二五年一〇月二七日

合祀イヤです・アジアネットワーク

合祀取消し要求靖国行動